

山岳部部歌

伊藤長七(客員) 作詞
神保 格(10回・客員)作曲

(♩ = 116)

1. あや おま げは ばせ たん かこ きの とも うり かふ いか のく
2. ふつ よき うせ のぬ みゆ ねき のの あた さに ぼま らよ けり
わと しけ のて はぞ ぼそ ー たそ くぐ こあ うづ げさ なが のわ
しき らよ くき もな とが おれ きを てと んめ さく いれ には
おい おで しゆ のたい ー てろ るも むな らつ さか きし のき
かこ のこ れし んん がしゅ くう をの きか みみ みこ ずう やき

山岳部部歌

- 一、 仰げば高き東海の芙蓉の峰の朝ぼらけ
鷺の羽搏く高原の白雲遠き天際に
雄々しく立てる紫の彼の連岳を君見ずや
- 二、 秀麗の気こるところ
南北凡そ一百里
我が日の本の脊梁と
外つ国人も仰ぐなる
この俊嶺の懐に
暫したたむか鳳翼を
- 三、 山は千古の森深く
つきせぬ雪の溪間より
とけてぞそそぐ梓川
清き流れをとめくれば
温泉の色もなつかしき
こゝ信州の上高地
- 四、 都の塵よ立たば立て
浮世の風よ吹かば吹け
我が霧陰のますらをが
結びも固き団欒の
思いは翔る楽園に
集う友がき山岳部
- 五、 学びの庭の朝夕に
数う教えの文の草
今はたよずる高山の
こゝにも摘むかつが桜
御花畑の薫風に
囀る鳥も愛づらしや
- 六、 神の刃を揮いては
削りて成せる穂高岳
宵漢を磨る槍ヶ岳
有明の峰喋ヶ岳
こごしき岩をめぐりては
よずるも嬉し我が脚に
- 七、 もしそれ南御岳の
巨人の胸にわけ入りて
天上の美を探るとき
北白馬の絶頂に
北海の波を望むとき
我が雄心の躍るかな
- 八、 巖を砕く鉄槌に
我が手に揮う紅血は
科学の闇を啓くべく
高きに叫ぶ覚醒の
男の子の歌の一世に
懦夫の眠りもさますべし
- 九、 あゝ麗わしき山と水
扶桑の国の地理にみて
三千年の我が民の
其の古を思うとき
誰かは後に仰がるる
国の誇りを忘るべき
- 十、 それザクセンの林中に
ドイツの国の力あり
清き流れはアルプスの
深き谷より出づとかや
あゝ桐陰のますらをが
やがて花咲く春や何時